

光照寺旅行（北陸）

法話

二〇一六年十月二十九日

於

砺波ロイヤルホテル

（富山県）

「道宗、近江の湖を一人してうめよ」

佐々木玄吾先生 講述

法話

こんばんは、お疲れのところ二十分程時間を取っていただきましてお話をさせていた
だくということを非常にありがたく思っております。私の講題は「道宗、近江の湖を一
人してうめよ」という言葉なのですけれど、これは蓮如上人の『御一代記聞書』の一九
二条にあるわけですね。副住職が資料を作って下さって皆様の手元にあるわけです。一
緒に読ませていただきたいと思います。

一 善知識ぜんじしきの仰せおほなりとも成るまじきせんじしきなんど思うは、大きなるあさましきことなり。
なおほにたる事なりとも、仰せおほならばなるべきと、存おほずべし。此この凡夫ほんぶの身みが仏ぶつになるうえ
は、さてなるまじきと存おほずること、あるべきか。しかれば、「道宗、近江の湖を一人し
てうめよ」と、仰せおほ候おほうとも、「畏かしこまりたる」と、申おほすべく候おほう。仰せおほにて候おほわば、な

らぬこと、あるべきか」と、申され候う。

『蓮如上人御一代記聞書』一九二条（『聖典』八八九頁）

これはですね、蓮如上人の時代に道宗がですね、道宗の決意なのですけれども、これは善知識という先生を持つ人の実感なのです。しかし、これを普通に考えると、とてもこんな無理なことを言うことでとても領けない内容なのです。近江の湖を一人してうめよ」と言っても「かしこ畏まりたる」と、申すべく候う。」と。そういうことは普通は考えられない。

今日、バスの中で観ましたビデオでは「うめよ」ではなくて、「のみほせ」と言っていて、一生懸命飲むという話が載っていましたけれども、「くめ」という話もある）本当は色々あるのでしょうか、ここでは「うめよ」、うめていく。普通では考えられない。とても人間の理性では考えられない大変理不尽なことを蓮如上人が強制的におっしゃる。しかしそれにもかかわらず道宗はそれをやった。承知しましたと言って受け取るのが弟

子の心得なのだとおっしゃっているのです。こういうのは現在の人達はとも考えられないことであつて、こういうことが言えるのはどういふことなのかと思つたのですけれども。私はですね、これは善知識、先生を持つ人の本当に実感、なるほどその通りだといふことを思う。道宗さんも蓮如上人を善知識として仰いでいたわけですから、ずいぶんこの前に体験がいっぱいあつたのではないかと思つたのです。といふのは蓮如上人といふ人は、吉崎御坊を造つたり、山科の本願寺を造つたり、大活躍をされた人ですから、その傍らに仕えている道宗はきつともつと大変なこと、これは出来るだらうかと思つたことをいっぱい聞いたに違ひないのです。それに対してずっと自分の身を振り返つてみたら、本当にすべて蓮如上人の言われることは正しかった。本当にそうだったといふことを深く頷いてこういう言葉になつたのだと思つたのです。

実は私も細川先生という方がおられました、色々無理なこと、無理難題といふことがあつたりしました。私がまだ若い時、三十何歳の時に光明団東京支部の支部長だつたのです。その時に本部の本館を建てるときに、「東京から五百万円ほど金を用意して欲し

い」と私に言われましたから、私は安月給で、そして家は建てたばかりで、子供は生まれたばかりで五百万円というのを言われた時に、私は軽はずみですから「分かりました、そうしましょう」と言ったのですけれども、帰ってから女房に相談してみたらとてもこれは難しいと思ってですね、先生が来られた時に、「五百万円というのは大変だから四百万円にまけてくれませんか」と。そうしましたら先生が、「一旦男が領いたことを変更するのはお前の鼎の軽重を問われるから絶対にそういうことは許さない」と先生は言われました。それで私はいよいよ腹をくくって日野の方に大きな土地を買いましたから、どんどん値上がりをする時期でしたから、あれを少し売ってそれを払おうかというふうに思ったのです。先生は私が蒼い顔をしているものですから助け船を出して、どういったかと言うと、「田中先生という病院の院長さんがおられるから、あそこへ行つて話してみろ。そうしたらだしてもらええるから」と言つて。それで私はですね、田中病院の田中郁雄さんのお父さんですけど、そこへ行つて「私も百万円ほど出すから先生も百万円ほど出して、こういうふうには五百万ほど集めなくてはいけないのだけれど宜しくお願

いしたいのですが」と言ったら、田中先生はもう何と軽い気持ちで「分かりました。直ぐ出します」と言って何のこともなかった。後から先生に聞いたたら、「お医者さんは小遣いみたいなものだから」とか言われました。私はそれだったらどうして二百万円と言わなかったかと思って非常に後から悔くやんだのです。（笑い）そういう分けて、やつと集めて皆さんからも集まって五百万円を出すことが出来たのですよ。私にとって本当にその五百万円を出すことは「近江の湖をうめよ」と言われるくらい大変なことだったので。三十代の私にとっては。そういうことがあります。その道宗という人もいっぱい体験があったと思うのです。蓮如上人が大変活躍された人だから、その時にやはり『「畏かしまりたる」と、申して仰おおせにて候うわば、ならぬこと、あるべきか』、というふうになり周りに人に道宗が言われたというのは、道宗における先生を持つ人の実感、あるいは、信心の人の真骨頂というものがこの言葉に現れているのだと私は思いますね。本当にこれは深く深く頷くこととなるほどなあと思います。私も先生に付き合っって色々なことを言われましたからですね、「豊平に行け」などと言われると「はい畏かしまりました」と。

こう言つて東京を置いて豊平に行つて、「道場は俺が造るから運営の方はお前がやれ」とかと言われるから、そのようにしてやりましたけれども、本当にこれは先生を持つ人の実感。あるいは信心念仏の人の実感がここに現れていると思えますね。それで細川先生は言われました。この文章を解くカギはこの文章の真ん中のほうですね、

「此この凡夫ほんぶの身みが仏ぶつになるうへは、さてなるまじきと存ぞんずること、あるべきか。」

これがこの文章を説くカギだと言われるのです。此の凡夫の身とは私、この欲も多く怒り腹立ち嫉そねみ妬ねたむというこの凡夫の自分ですね。仏になる。仏になるといふのは涅槃の覺りを開いて人の為にも自分の為にも働いていけるというそういう仏になるということ。そういう身に我々はさせていたでいるわけです。それはそういうことが出来たということになれば、「成るまじき」そういうことはとても出来ませんと、思うようなことはあるはずがないのだと。あるべきかということが二回でてくる。この文章に最後に「仰おほせにて候まちわば、ならぬこと、あるべきか」と言つてならぬことがあるはずがない。

仰せということ。そういうふうに出ているのです。そこで私はこの凡夫の身が仏になるというのは一体どうしたことかと。凡夫とは私たちですね。私たちが仏になるとは一体どうしたことかとということ、そういうことを考えるわけです。それは大体、仏になるのは直ぐに仏にはならないのです。私たちは。光照寺に行つて住職の話を書いて御本尊に参つて念仏してああ分かりました、南無阿弥陀仏、仏になりました。そういうわけにいかないのです。そこで仏になるとは一体どうしたことなのかということを考える。それは修道の五位と五つの段階があると言われるのです。一つは「資糧位」という聞法するという段階。聞法し、自分で考えてみるという、お話を聞いて聞法し考えてみるという段階それが「資糧位」。次に「加行位」。「加行位」という加える行というのは、それはどういう位かという、家に帰つて勤行しなさいと言われるのですから、道宗が言われるように、「あさつとめにかかさじと、たしなむべし」と。聞きつ放しではなくて朝の勤行は欠かさないというふうに私は嗜たしなみたい。そういうふうに精進したい。そういう段階があるわけですね。それは非常に大事な段階で、道宗はそのことを非常によく

やられた。ひと月の嗜みはちかきところ、御開山様の御座候うところへ行つてそこで聞法する。そういうことを嗜む。一年のたしなみには、京都の御本寺へ行つて蓮如上人に出会いさらに聞法していくというのが道宗の心得、嗜み。そういうのを「加行位」と言う。行をする。そこまで来てもそれでもまだ信心の人になるとは言えないのです。そこを突破する。突破したところが「通達位」。「通達位」というのがどういふことかというのと、自分に通達し、自分が分かり、仏様が分かる。仏様の本願が分かり、自分が分かるという段階がある。それを正定聚しやうていしゆの位につくと言いますけれど、その正定聚の位につくというのはどういふことかと言うと、それは非常に易しく言えば、「他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけり、南無阿弥陀仏」。これが「通達位」と言うのです。他力の悲願、如来の本願はこのような体たらくの私の為でありました。南無阿弥陀仏と言つて、自分の体たらくのお粗末な自分が分かり如来の本願が分かる。そういうのを「通達位」という。そうして「修習位」というのはどういふことかと言うと、生活実践に移し、世の為、人の為に働く人になるということです。念仏をして。「究極位」とい

うのは最後に涅槃の位を覚るといふ、つまり仏になる。仏になるといふのがその最後の段階なのです。しかし必ず通達したものは仏になるわけですから、この凡夫の身が仏になるとはそういうことなのです。ところがそこに行くためには非常に大事なことがあるわけです。それは善知識を持つということなのです。善知識を持つことは先生を持つということなのです。道宗にとつては蓮如上人が先生だったのです。親鸞聖人にとつては法然上人が先生だったのです。浄土真宗にとつては先生を持つことがとつても大切なのですね。そこで先生とはどういう役割をするのかというとそれは三つ役割があるのですね。一つは畢竟軟語ひっきょうなんごと言つて徹底的に易しい言葉で相手に教える。分かるまで易しい言葉で噛み砕いて相手の環境をよく知つて分かるように教えるというのが畢竟軟語ひっきょうなんご。つまり先生はそういう役割がある。しかし分かつただけで、易しくてああ分かりましたということになつただけでは人間はものにならないのです。徹底的に叱る。畢竟呵責ひっきょうかしやく。徹底的に叱られないと人間はものにならない。ですから畢竟呵責ひっきょうかしやくということが先生の役割なのです。私は周りの人がかわいそうに思い逃げ出すくらい叱ら

れましたから、もう本当に最後の最後まで先生に叱られたので思い出と言えば叱られたという事しか思い出にはないのですけれども、本当に叱って下さる先生を持つということが大事なのです。私には叱って下さる先生がいませんという人があるのならば、それは自分に問題があるのです。つまり叱ってくれる先生を持たないということはその人が先生のことを尊敬しないからです。頭を下げてどうぞ叱ってくださいという姿勢をもたないので叱りようがないのです。

そしてもう一つは易しい言葉で叱る軟語呵責^{なんごかしやく}。易しい言葉の中に、厳しいお叱りを受けるというそういう段階があります。そのためには自分の姿勢というものが非常に大事なのです。どういう姿勢かという私たちには親近と言って、親しく近づくという先生を持つというのは、先生に非常に親しく近づくことが必要なのです。私も思い出すのですけれど私は細川先生に叱られたと言いますけれども、若い時は私が吉祥寺の下宿に居た頃ですね、先生がこられて私の下宿に入ってきて二人で朝まで話して、何を話したのか全然わからんけれども、朝まで話して酒一升しかなかったけれど二人で酒を飲んで何か

知らなければどちやどちや話をして朝になる。そうしたら明け方になって少し明るくなってきた頃にはもう酒がない。「もう酒屋が開いているから買ってこい」と先生が言いなさるから、酒屋へ行って私は新しい酒を買ってきてまた飲み始めるといふ有様でした。親しく近づくことがないと畢竟軟語ひつきょうなんごという教えはなかなか聞けないのです。自分のところは隠しておいていいところだけ取ろうとしたってそれはだめなのです。自分の所を開けっ放しにして自分の環境を何もかもさらけ出して、そうして教えを聞くという姿勢が必要なのです。そういう親近なんごというか、親しく近づくということがないとやっぱり畢竟軟語ひつきょうの教えは聞けないのです。そうして畢竟呵責ひつきょうかしやくという徹底的に叱るということは、叱られるということは自分が本当にへりくだってその先生を高く高く敬わなければ先生の方は叱るわけにいかないのです。叱れば何でこんなことを言うかと皆逃げていくからです。逃げられてはたまらないから先生も叱ることが出来ないのです。もし自分には叱ってくれぬ先生がないと言う人がいるならばそれは先生を尊敬しないからそういうことになるのです。叱られないということはそれは自分に問題がある。そうして軟語呵責なんごかしやくとい

うのは非常に易しい言葉で叱る。何でもない言葉のうちに非常に厳しい叱りを受ける。いつもいつも大声で怒鳴りあげるということではなくて、静かに言われるのにぴたっと自分に当てはまるといふことがありますよね。私は五十四、五歳の時に、学校に勤めていた時、学級崩壊といふのが起こりまして、本当に困って落ち込んでいました。細川先生がこの本を読めと言って『森信三全集』といふ本を私に与えてくださった。私はそれを読んで、読んだ中で学級崩壊といふ教師としての失敗といふのはどこにあったのかと、やはり教材研究が足りなかったのだといふことが『森信三全集』を読んで分かりました。「この本を読んだらどうか」と先生に言われ、そのことが非常に私自身を翻すといふか、私自身の欠点といふか、そういうものがありました。私は非常にそのことでありがたいと。そういうのはやはり供養の心、結局先生に対して供養といふのは法供養とか財供養とかありますけれども、自分がものを差し上げてそうして聞くといふ姿勢がないと軟語呵責なんごかしやくといふ、そういう言葉は自分で受け止められないのです。

次に、私自身に対する先生の教えといふことについて、さっきも色々なことを言いま

したけれども、それはこういう言葉が今までずっと身に沁みている。それはこういう言葉でした。私に対する先生の仰せ。それは今からだいぶ前、昭和四十七年の九月二十四日に先生からお手紙をもらいました。それは私が四十二歳で先生は五十三歳。私より十一歳上なのです。その時に九州の博多の空港から東京へ向かって私の家でお話をしようと思つて飛行機に乗ろうとされたのです。腹が痛んでそのまま東京へ来られなかつたのです。自宅へ帰つた。お腹が痛くなつて。胆のうが痛くなつてです。その時に私に向かつて先生が手紙を下さいました。その手紙が今でも私の一生を支配したと思います。その手紙を読んでもみます。その手紙はどういう手紙かと言いますとこういう手紙です。先生が来られなかつたから手紙を書いて下さつたものです。

君の今後大切なことは、皆の為に何か話が出来て、あるいはそれを機縁として一人でも仏法に志す人が出来たり、更に深まる端緒を掴んだ人が生まれたりするようなことになる。そのようなお話が出来るとような人になることが一番大切ではないか。

そのための苦勞、努力、聞法、勉強ということがなければいつまでも他の人に頼って自身は結局深い進展を遂げ得ないのではないか。いつまで聞法しても唯、聞法と
言うだけでは不十分である。それが生活の中に生きるといふことがなければなら
ない。しかし聞法して生きるといふ事だけではもう一つ足りない。それは自利のみで
個に留まる為である。人に語りかけるといふことが大切。人に語ることがはたらし
かけである。真に念仏を生きることである。人に語るには勉強をし、整理し工夫し
なければならぬ。此のことが君の現在最も不足している点だと思えます。テキスト
の中心はやはり『夜晃全集』であろう。君が現代的でないと言いかもしれぬが、あ
の中には時代を超えたものが光っている。少なくともそういう箇所がかなり多い。

この言葉は私の終生の課題である。この言葉を聞いてですね、四十数年が経ちました。
それ以来、とぼとぼではあるが話す機会を与えられたことは私の喜びであります。光照
寺の旅行でこうやって話すことが出来ることは私の喜びであります。本当にありがとう

「道宗、近江の湖を一人してうめよ」

ございまして。

あとがき

本書は光照寺旅行『世界遺産五箇山と、妙好人 赤尾の道宗を訪ねて』Ⅱ北陸新幹線に乗って富山・金沢へⅡと題して、平成二八年十月二十九〜三十日の一泊二日の旅行（旅行幹事長・谷口正司氏、幹事・淡海雅子氏、平山正三氏）を企画した中で、初日の十月二十九日に宿泊先の砺波ロイヤルホテルにて佐々木玄吾先生にご法話を頂いた記録です。

当日は、初日の旅程を終えて、ホテルに到着して間もなくのご法話でしたので、大変お疲れの中、貴重なご法話を頂戴しました。旅程で、西赤尾の行徳寺（妙好人、赤尾の道宗が開基）のお寺へ参拝した後のご法話ということもあり、とても身近に道宗を感じ、道宗の求道心に心を揺さぶられるご法話でした。行徳寺の坊守さんの道宗についてのお話と、先生のご法話という厚みのある今回の旅行でありましたことを幹事の皆様と喜んだことでもございました。

佐々木先生には原稿に目を通して頂き校正賜りましたこと、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

ご法話のテープを原稿に起こして下さいました、護持会役員の淡海雅子様へ感謝申し上げます。

合掌

平成二九年十月一日

光照寺 副住職 池田孝三郎



佐々木玄吾先生ご法話



行徳寺にて

光照寺旅行（北陸）

「道宗、近江の湖を一人してうめよ」

佐々木玄吾先生講述

2017年（平成29年）10月1日

発行 真宗大谷派 弘興山 光照寺

事務局 〒331-0821

埼玉県さいたま市北区别所町102-2

電話 048-651-2781